

平成 30 年 9 月 4 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04551

研究課題名(和文) 高機能自閉症スペクトラム障害学生へのキャリア教育・就職支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a program for career education and job-seeking support

研究代表者

西村 優紀美 (YUKIMI, NISHIMURA)

富山大学・保健管理センター・准教授

研究者番号：80272897

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学生と支援者との面談のプロセスを一定の流れでルーティン化し、対話の場をキャリア教育そのものとして位置付けた。プロセスとは、問題が起きた場合、現状を整理する、多様な視点(生活面、課題の理解度、授業の理解度、課題への取り組み方等)から問題を把握する、Plan-Do-Seeサイクルで課題解決を試みる、失敗をすぐに改善に活かしていく、学生と支援者は課題解決のための協働者としての関係性を持つ、等である。修学支援に引き続き、就職活動支援、就職後のフォローアップ支援という支援の流れを構築し、卒業生同士の交流も取り入れることによって、卒業生が生活の質について認識する機会を持つことができた。

研究成果の概要(英文)：This study describes a process comprising a series of meetings between university supporters and students with autism spectrum disorder, which are standardized so that the process functions as career training. During this process the students, with the help of their supporters, deal with problems by 1) gaining a clear understanding of the nature of the problem, 2) examining the problem from multiple perspectives, 3) attempting to solve the problems using the 'Plan-Do-See cycle', 4) transforming apparent failures into a learning opportunities, and 5) maintaining a collaborative problem-solving relationship with their supporters. The provision of a system of support that continues beyond university studies, job-seeking support and follow-up during the early stages of employment, along with mutual support by fellow graduates, give graduates the opportunity to consider their quality of life and work-life balance. A consistent program ensures a stable social life based on good human relations.

研究分野：障害学生支援

キーワード：障害学生支援 自閉症スペクトラム キャリア教育 就労体験 就職支援

1. 研究開始当初の背景

平成 28 年 4 月、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が施行され、大学・短期大学・高等専門学校（以下、「大学等」）においても、「障害を理由とする不当な差別的取り扱いの禁止」や「合理的配慮の提供」が求められることとなった。独立行政法人日本学生支援機構（以下、機構）が平成 29 年 4 月に機構が公開した「平成 29 年（2017 年度）大学等における障害のある学生の修学支援に関する実態調査分析報告」によると、発達障害（診断書有）の人数は、4,150 人で、このうち支援障害学生は 3,023 人であった。

富山大学では、平成 29 年 10 月現在の支援学生数は、ASD（自閉症スペクトラム障害）が 60%、ADHD（注意欠如・多動性障害）が 33%、複数の障害特性を併せ持つ学生は 7% となっている。この数値は診断のある学生と診断はないが近似の特性があり支援を行っている学生の数を含めたものである。診断がない学生の場合、「障害」を理由に支援を行うというわけではなく、「修学上の問題」に対する支援を個別に行っていく。その内容は、学生本人に対するコーチングが主な支援内容となっており、学生は支援者との対話を通して修学上の問題を解決していくことになる。

富山大学学生支援センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室では、発達障害大学生への支援を、高校から卒業後まで継ぎ目なく包括的にサポートするシームレス支援として位置づけているが、自閉症スペクトラム障害大学生への就職活動支援は、多くの場合、非常に大きな困難を伴う。移行支援を開始した当初は、就労支援機関につないだ時点で、支援室の役割は終了すると予想していたが、実際には就労支援機関から、大学での支援状況や特性に関する情報提供を求められたり、彼らとのコミュニケーション

支援を要請されたりすることが多かった。複数の学生に関する支援会議を重ねるうちに、高機能自閉症スペクトラム障害者の就労支援は、就労専門機関でも未だ手探りの状態であることがわかってきた（桶谷・西村,2013）。コミュニケーション上の問題が、適切な配慮を探究することへの障壁になっており、そのことが定着支援にも影響を及ぼし、離職に至るケースもあることがわかった。このような実態を目の当たりにして、大学における修学支援を通じて構成してきた「コミュニケーション支援」という方法論は、就労支援機関での支援においても応用できるのではないかという仮説を持つに至った。しかしながら、修学支援におけるコミュニケーション支援は、大学という狭いコミュニティで行われてきた方法論であり、それを拡げて就労移行支援事業所や企業を巻き込んだ中で適用させていくには、大学生生活全体を通じた包括的支援として再構築する必要があると考えた。

【参考文献】

・独立行政法人日本学生支援機構 障害のある学生の修学に関する実態調査,2017 .

https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/index.html

・桶谷文哲・西村優紀美：発達障がいのある大学生への支援 - 修学支援から就職支援への展開 - ,学園の臨床研究,2013.

2. 研究の目的

本研究では、高機能自閉症スペクトラム障害学生が社会自立を目指すための支援のあり方に焦点を当て、以下の 3 つの点を明らかにすることを試みる。1)高機能自閉症スペクトラム障害者の特性を生かした「働く」意識を育てるプログラム開発、2)高機能自閉症スペクトラム障害学生が自分の特性を認識し、支援者と協働しながら「働く」体験を行うインターンシップのあり方、3)高機能自閉症スペクトラム障害の優位な特性を発揮させる職場環境の探求。これら三つのプロセスを組

み込んだキャリア教育の開発を構築する。

3. 研究の方法

本研究では高機能自閉症スペクトラム障害学生に対するキャリア教育プログラムを開発することを目的に、修学支援と並行して、「働く体験」の場を提供した。体験を通じた当該学生の意識変容をインタビューや行動分析によって明らかにし、最終的には、高機能自閉症スペクトラム障害学生の弱い認知特性である「他者の視点」を育て、将来に対する自己像を描きながら社会参入することができる「キャリア教育プログラム」の開発を目指した。

(1) 修学支援を継続している高機能自閉症スペクトラム障害学生に対して、ボランティア活動、学内インターンシップを行い、活動における当該学生の行動分析を行うとともに、学生とその指導に当たった学内支援者をペアとしたインタビューを行い、学内支援者が活動を共にしながらどのようにコミュニケーションすることが、学生の活動性を高めることに繋がるのかを分析した。

(2) 得られた知見をもとに、高機能自閉症スペクトラム学生が学外の就労移行支援事業での体験プログラムに参加し、同様の調査を行う。活動における当該学生の行動分析を行うとともに、学生とその指導に当たった学外支援者をペアとしたインタビューを行い、

学外支援者が活動を共にしながらどのようにコミュニケーションすることが、学生の活動性を高めることに繋がるのかを分析した。学外実習を行うこと、あるいは学外支援者が指導に当たることにより、学生の「働く」という意識が学内実習の場合とどのように異なり、どのように意識の変容や行動の変容をもたらすかについてインタビューを通して振り返った。次に、就労移行支援事業所が提携する企業での就労体験もを行い、学生の「働く」意識にどのような影響を及ぼすかについて、行動観察とインタビューにより分析

した。

4. 研究成果

発達障害の特性の中でも、自閉症スペクトラムの特性がある学生に対するキャリア教育と就職のための支援プログラムを開発することが本研究の目的であった。

キャリア教育では、実際の体験を通じて「自己と社会」に関する多様な気づきや発見を獲得させることが重要となるが、仕事に直結する体験学習の場のみで行われるものではない。日々の大学生活を送ることや仲間との関係を築いたり、誰かの役に立つ体験をしたりすることを通して、自らの役割の価値、自分と役割との関係、自分と社会との関係について認識していくものである。本研究では、学生と支援者との面談のプロセスを一定の流れで進め、ルーティン化し、定期的な対話の場をキャリア教育そのものとして位置付けた。プロセスとは、問題が起きた場合、現状を整理する、多様な視点（生活面、課題の理解度、授業の理解度、課題への取り組み方等）から問題を把握する、Plan-Do-See(計画 - 実行 - 評価)サイクルで課題解決を試みる、失敗をすぐに改善に活かしていく、学生と支援者は課題解決のための協働者としての関係性を持つ、等である。

(1) 学内インターンシップ

実際に働く体験として行った学内でのインターンシップでは、以下の3点で有効性が認められなかった。職員が、学生が失敗しないようなさりげない配慮を行ったため、学生が問題に気づきにくかった。他の学生との仕事量の差が大きく、当該学生が自信をなくしてしまう結果となった。仕事内容が多岐にわたり、学生の許容量を超えてしまった。

(2) 学内ピアサポート活動

在学中に発達障害者に特化した就労移行支援事業所でおこなった就労訓練の体験が、具体的な働くイメージを持つために非常に有効であった。特に、プログラムの中で行わ

れた仕事において、「従業員(役)」と「上司(役)」、「客観的な評価者(役)」という3つの役割を交代することによって、自分自身の振る舞い方や伝え方の問題についての気づきや、よりよい振る舞い方や伝え方を試すことができ、支援者からの一方向的な評価よりも現実的な点に関しての内省が深まった。

<事例A：自閉症スペクトラム>

支援開始当初、Aは「何年も留年している自分は、生きている価値がない。」と語った。支援者はAの語りに共感しつつも、進級するために単位を取得すること、そのために、「講義に出る、課題を出す、テストを受ける」といった修学支援を行った。一方で、コミュニケーションの練習の場として小集団活動に参加を促すと、積極的に参加するようになった。この中で、自分が話したいことを話すだけでなく、他者の話に耳を傾けることを学んでいき、また、他の学生の発言に賛成の意を示したり、賞賛したりする発言も見られるようになっていった。また、Aに対して身体障害学生へのピアサポート活動への参加を提案した。相手の立場に立って考え、相手が望むように動く体験をする良い機会になると考えた。当初、なんでもやってあげていたAだったが、車椅子ユーザーの学生から、「それは自分でできますから、しないでいいです」という指示をもらい、適度なサポートの仕方を身につけていった。

(3)学外就労体験

その後、Aは就労移行支援事業所の「ワーク体験」に参加した。実際に発達障害者に対する就労のための訓練を行っている企業に通い、他の訓練生と同様のワークを体験するものである。ワーク体験の環境は、実際にオンライン店舗を持つ「疑似職場」であり、多くの訓練生が日常業務としてWeb更新や経理、商品管理等を行っている。午前中はスタッフが管理職役になり疑似職場を統括しているが、午後のオンライン店舗業務では訓練

生が店長役になりグループの訓練生・実習生への指示だしのほか、業務上の相談も受けるという内容になっている(桶谷,2015)。

	体験的理解	場面	具体的な語りの一部抜粋
1	報連相の重要性	メール等によって報連相を適宜行う職場環境	印象に残ったことは、仕事に対する報告メールをすること。たとえば作業計画を立てるとする。それで変更があれば変更して、それを伝える。終わるときに日報なり、定時報告なりをする。
2	特性理解	立場関係のあるコミュニケーション	自分は人に聞かなくても記憶から推測してやってしまう癖があるが、独断でやることになってしまう。報告もすることが大事だと思った。
3	自分自身への気づき	挨拶を交わす職場の雰囲気	職場では皆、挨拶をして帰っていきます。来ればおはようございます、帰るときは失礼します。(自分は)そういうのをあまりしなかったなあと思う。
4	相手に対する返答	上司役のスタッフから指摘を受ける	「仕事の話聞いてわかったら、はいと言ってください」と言われました。僕はわかったらやればいいと思う。「はい」と言わなくてはならないと気づいた。

発達障害のある学生にとって、グループワークでの会話や協働作業は苦手なことが多いにもかかわらず、このワーク体験では直面した問題による大きな気分の落ち込みは見られなかった。たとえば、上司役のスタッフから、指示に対して返事をするよう指摘を受けたが、Aは反発することなく、また、注意を受けた自分を否定的に捉えて落ち込むこともなく、社会人としてあるべき態度を指導してもらったと受けとめている。Aだけでなく、参加したすべての学生が、一様にポジティブな自己イメージを維持したままワーク体験を終えることができたことは大きな発見であり、体験学習の成果であった。

ここで得られた自分自身の特性への気づきは、大学生活にも良い影響を与えた。最終学年次になったAは、同じゼミ仲間との関係に不安を覚えながらも、言葉遣いに気をつけ、返事をすることや挨拶をするなどの社会的スキルを大学生活で実践し、安定した大学生活を送っている。「今から思えば、1年生の頃は自分ばかりしゃべっていた。他の人の話には興味がなかったから。でも今は他の人の話を聞くと、‘もし、自分がその人だったら’と思って相手の立場になった時の気持ちを想像しながら聞いている」との振り返りをすることができた。

(4)就職後のフォローアップ支援

企業に就職した卒業生が職場に適応していくプロセスを、大学支援者、就労移行支援事業所、企業担当者で整理し、段階的な移行支援の在り方を提案した。大学や就労移行支援事業所では、一人の担当者がすべての活動を継続的に支援するスタイルがとられるが、企業では「直接的な指示を与える指導者」、「仕事以外の情報を提供する者」、「勤務状況全体を調整する上司」というように、複数の担当者が重層的に指導に当たるといったスタイルが、卒業生にとって有効な支援体制であった。

就職した卒業生へのフォローアップ支援が、継続的で安定的な就職を果たす大きな要因となった。配置換えや異動による環境の変化が、もともと持っている社会的脆弱さを誘発するきっかけとなる場合もあるが、大学支援者による継続的な定期面談という安定した場があることで、卒業生の混乱は早期に収束することができた。

修学支援に引き続き、就職活動支援、就職後のフォローアップ支援という支援の流れを構築し、卒業生同士の交流も取り入れることによって、卒業生がQOL (quality of life) やWLB (work-life balance) について認識する機会を持つことができた。一貫した支援プログラムは、自閉症スペクトラム者にとって、良好な人間関係を基盤とした安定的な社会生活を保障するものである。

(5)まとめ

青年期にある発達障害学生への支援は、具体的問題の解決だけにとどまらず、問題に対して距離感を持って眺めたり、問題を解消したりするプロセスを通して、青年期の心身の成長を支える発達促進的な取り組みとしての意味がある(桶谷・西村,2013)。キャリア教育は、体験を通じて自己と社会に関して多様な気づきや発見を得させることが重要であるが、仕事に直結する体験学習の場のみで行われるものではなく、修学を通して、あるいは小集団活動による仲間との関係性を通して、さらには、自分が誰かの役に立つという体験を通して、自らの役割の価値、自分と役割との関係、自分と社会との関係について認識していくものである。発達障害のある学生のキャリア教育の在り方、キャリア支援の方法について、今後もさまざまな実践を重ね、探求していく必要がある。発達障害者のキャリア教育は、学生本人が成長し、社会自立することを目的としているが、筆者らは、彼らが生活する社会、そして彼らが働く企業も同様に成長していく必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

西村優紀美(2015)発達障がいのある学生の包括的支援のあり方, CAMPUS HEALTH52(2)40-45.

西村優紀美(2015)障害児・者の教育保障の取り組みとその課題, 社会福祉研究, 公益財団法人鉄道弘済会, 10-17.

西村優紀美(2015)大学における発達障害の学生に対するキャリア教育とキャリア支援, 障害者問題研究 43,(2). 全国障害者問題研究会, 91-98.

西村優紀美(2017)発達障害支援のトランジション~大学における修学支援を中心に. 小児科診療 Vol.80No.7 特集 新・発達障害支援~小児科医へのメッセージ. 診断と治療社, 863-867.

〔学会発表〕(計7件)

西村優紀美, 桶谷文哲, 日下部貴史: 発達障害のある高校生に対する大学体験プログラムに関する一考察. 全国障害学生支援連絡協議会第二回大会ポスター発表. 2016.6.25. 東京.

西村優紀美, 中山肇, ソルト: 発達障害学生の社会自立と就労支援 - 青年期の発達を支える連携の場づくり. 一般社団法人日本LD学会第25回大会自主シンポジウム企画・話題提供. 2016.11.19. 神奈川.

西村優紀美: 才能を活かす特別支援への先駆的取り組み - 発達障害のある生徒に対する大学体験プログラム『チャレンジ・カレッジ』の試み. 2016年度一般社団法人日本LD学会公開シンポジウム. 2016.12.23. 大阪.

日下部貴史, 西村優紀美, 桶谷文哲: 富山大学における発達障害学生に対する社会参加支援の実践と課題. 全国障害学生支援連絡協議会第3回大会ポスター発表. 2017.6.16. 京都.

西村優紀美, 中山肇, 牧田広臣: 発達障害学生に対する安定的な就労を支える連携の

在り方~大学・就労支援事業所・企業との連携の場づくり. 一般社団法人日本LD学会第26回大会自主シンポジウム企画・話題提供. 2017.10.9. 栃木.

西村優紀美: 高等学校における特別支援教育 - 多様な支援実践から高校段階の支援を考える~大学における障害学生支援の在り方. 一般社団法人日本LD学会第26回大会学会企画シンポジウム話題提供. 2017.10.8. 栃木.

西村優紀美: 発達障害の人の社会参加 - 大人になって幸せになるために~発達障害大学生に対する社会参加支援: 修学支援・就職支援. 一般社団法人日本LD学会第26回大会大会企画シンポジウム話題提供. 2017.10.8. 栃木.

〔図書〕(計5件)

西村優紀美(2016)学校における支援 - 学生の支援と課題. 下山晴彦, 村瀬嘉代子, 森岡正芳編著, 必携発達障害支援ハンドブック. 金剛出版, 343-348.

西村優紀美・水野薫(2016)実習場面での支援. 高橋知音編著, 発達障害のある大学生への支援. 金子書房, 62-72.

西村優紀美(2016)2.教育 大学での支援. 日本LD学会編, 発達障害事典. 丸善出版, 146-147.

西村優紀美(2016)3.心理 高校生・大学生とメンタルヘルス. 日本LD学会編, 発達障害事典. 丸善出版, 276-277.

西村優紀美(2016)6.成人生活. 日本LD学会編, 発達障害事典. 丸善出版, 472-473.

西村優紀美(2015)青年期の発達障害とその支援, そだちの科学. 日本評論社, 82-86.

6. 研究組織

(1)研究代表者

西村 優紀美 (NISHIMURA, YUKIMI)

富山大学・保健管理センター・准教授

研究者番号: 80272897